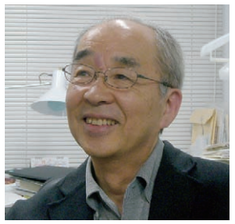
近代日本のポスターが示す複製技術と表現の時代性 美術館

ムサビ・コレクション誌上レクチャー

大正から昭和初期にかけて、さまざまな印刷技法による、
色鮮やかなポスターが数多く作られました。
その時代を駆け抜けたデザイナー・多田北烏（ただほくう）を通して、
日本のグラフィックデザインの黎明期を、
今井良朗先生と振り返ります。



今井良朗

本学芸術文化学科教授。1976 年から本学のポスターコレクション、絵本コレクションの体系化に従事。ポスター、絵本、デザインに関する展覧会を手がける。メディアを社会的な作用と文化現象としてとらえ、メディアの現在について考察する。

ムサビがポスターの価値を確立

本学のコレクションを代表するポスター。その数は約 3 万点を数えます。武蔵野美術大学 美術館・図書館の前身である、美術資料図書館が開館したのは 1967 年。ポスターコレクションの収集は、開館後まもない時期に始まりました。

最初に収集を提唱したのは、戦後日本を代表するグラフィックデザイナーであり、本学商業デザイン専攻（現・視覚伝達デザイン学科）の主任教授であった故原弘先生です。グラフィックデザイン教育の参考資料とすることが目的でした。

今井先生がポスター収集に携わった 1970 年代には、原先生はすでに退任していましたが、今井先生は学生時代に、原先生からデザインの神髄を学んだと言います。「デザインは技術や表現だけでなく、背景に潜む思想や理念を押さえて初めて成立するもの。そして社会性を持っているもの、と原先生は話していました」

いまでこそポスターは収集する価値があるものと考えられていますが、1970 年代当時は必ずしもそうではありませんでした。むしろ本学での収集がきっかけとなって、保存収集の機運が高まったと言うことができます。

戦前のもの、三越、資生堂、演劇、アメリカやポーランドなどの各国のものなど、多様なポスターを収集しているのが、本学のコレクションの大きな特徴です。

【凡例】 **作品タイトル**（制作年、サイズ）
発行者（社）名、デザイン
製版技術、印刷技術

キリンビール（1926 年、90×61cm）
麒麟麦酒、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

キリンビール（1926 年、91×60cm）
麒麟麦酒、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

キリンスタウト（1934 年、73×53cm）
麒麟麦酒、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

キリンビール（1935 年、92×61cm）
麒麟麦酒、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

ダイヤモンドサイダー
（1936 年、91×62cm）
布引礦泉所、サン・スタジオ
HB 式写真製版、 オフセット刷

キリンビール
（1920 年、90×62cm）
明治屋、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

特製 月桂冠
（1933 年、92×61cm）
明治屋、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

特製 月桂冠
（1938 年、92×61cm）
明治屋、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

蜂印香鼠葡萄酒
（1920 年、残存部 88×61cm）
近藤利兵衛、多田北烏
MP 式写真製版、オフセット刷

東洋一の大百貨店（1921-25 年、91×61cm）
白木屋、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

松坂屋新館開店（1934 年、106×76cm）
大阪松坂屋、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

芝浦電気扇（1926 年、91×62cm）
芝浦電気、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

近代日本の印刷技術の変遷

【凡例】 作品タイトル
（制作年、サイズ）
発行者（社）名、デザイン
製版技術、印刷技術

蜂印香鼠葡萄酒
（1926 年、93×62cm）
近藤利兵衛、多田北烏
HB 式写真製版、オフセット刷

三越呉服店
（1914 年、105×77cm）
三越、杉浦非水
砂目石版、石版刷

大正天皇騎馬図
（1914 年、53×38cm）
朝日新聞大阪本社、和田英作（伴定爾製版）
点描石版、石版刷
（大坂朝日新聞 1 月 1 日付録）

1867 年　この頃下岡蓮杖、横浜でアメリカ人に石版を学び、石版印刷を始め、その技術を門下の横山松三郎に伝える

1860 年　プロイセン使節オレインブルグ伯来日、将軍に石版印刷機と石版石を贈る

1868 年　下岡蓮杖、砂目石版で徳川家康像等を作る

1870 年　松田緑山、イギリスから石版機を輸入し、郵便切手、蚕種用紙、振出手形の製造を命じられる／本木昌造、長崎に活字鋳造所、新塾活版製造所設立／鉛活字、洋紙を使った日本最初の日刊新聞『横浜新聞』創刊

1871 年　梅村翠山、銅版印刷工場を建設

1874 年　梅村翠山、アメリカからスモリック、ボラールドの両技術者を招き、銀座に彫刻会社を設立、日本の石版業が始まる

1877 年　石井鼎湖、日本最初の石版多色刷に成功

1880 年　印刷局、写真石版を利用し、『国華余芳』を刊行

1887 年　合田清、木口木版所の生巧館を開業、木口木版を紹介する

1890 年　フランスからマリノーニ式巻取活版輪転印刷機輸入、印刷局、東京朝日、日本新聞社に設備／多湖実敏、ドイツから帰国し、ジンク版、亜鉛凸版を紹介／堀健吉と斉藤鈔太郎、写真亜鉛版を発表、猶興社を創設

1893 年　堀井新治郎、謄写版を発明

1891 年　泰錦堂、日本最初のジンク平版多色刷印刷物を発表

1894年『日清戦争実記』で写真網版を多数使用して注目される

1895 年　雑誌『太陽』創刊、日本最初の総合雑誌で写真銅版を入れる

1897 年　『写真製版技術』、石川巌の編纂で刊行され、初めて三色版印刷を紹介

1906 年　結城林蔵、撒粉式グラビアを製版し、『写真月報』に発表、フォトグラビアによる印刷物の始まり

1914 年　市田幸四郎、中西虎之助、オフセット自動輪転機を輸入、本格的オフセット印刷が始まる／日本でゴシック、アンチック体の活字が作られる

1916 年　市田オフセット、大沢保正らにより三色版を金属平版に転写する方法で、写真応用多色オフセット平版を実用化／浜田初次郎、グラビア輪転印刷機の製作

1920 年　HB 製版、市田オフセットと凸版印刷に設置される

1926 年　杉浦非水を中心に「七人社」結成、日本での商業美術運動の始まり

1932 年　秀英舎、平凹版ネオトーンを発表、共同印刷も平凹版を実施／『週刊朝日』増刊号にカラーグラビアを使用し始める

1929 年　写真植字機の実用機が共同印刷に設置される／多田北烏ら実用版画美術協会を結成

1936 年　全日本商業美術連盟結成

いとう呉服「上野 松坂屋」
（1922 年、104×75cm）
いとう呉服店、町田隆要(信次郎)
MP 式写真製版、オフセット刷

Osaka Shosen Kaisha
（1916 年、96×62cm）
大阪商船会社、町田隆要（信次郎）（大沢保正製版）
砂目石版、オフセット刷

蜂印香鼠葡萄酒
（1912-16 年、91×61cm）
近藤利兵衛、町田隆要（信次郎）
砂目石版、石版刷

砂目石版、石版刷
石版石の版面を粗めに磨き、ざらざらとしたタッチを出す。石版石に描かれた絵を直接、紙に刷り取る。

砂目石版、オフセット刷
石版石の版面を粗めに磨き、砂目を立てる。版面に描いた絵をゴム版に写してから、紙に再写する。

点描石版、石版刷
点描の点の大きさや割合を変えるなどして濃淡を表す。石版石の版面に製版し、直接、紙に刷り取る。

MP 式写真製版、オフセット刷
初期の写真製版を支えた国産の製版機で、精密さには欠けていた。版面の絵をゴム版に写し、紙に再写する。

HB 式写真製版、オフセット刷
写真の感光板によって原色を分離し、補色も可能な写真製版。発明したアメリカ人 2 人の頭文字から命名。版面の絵をゴム版に写してから、紙に再写する。

収集基準・収集作業の難しさ

ポスターは広告や宣伝、告知を目的に、新しいものが次々と作られます。膨大なポスターのなかから、美術大学のコレクションとしてふさわしいものを体系立てて収集するのは、容易なことではありません。

第一に、収集の選定基準を定めるのが困難です。「デザイナーを手がかりに作家主義で集めているところは多いけれど、ムサビではポスターをデザイン史や文化史の資料としてもとらえています。芸術的に優れているポスターだけではなく、教育研究活動のために必要なものを網羅的に集めています」と今井先生は言います。

実際の収集作業も簡単ではないそうです。いまは多くの分野のポスターを古書店から購入することができますが、収集初期のころはほとんどが寄贈でした。今回取り上げる多田北烏に関連するポスター 92 点も、1982 年に寄贈されたものです。

これに先立つ 1974 年、本学には町田隆要（まちだりゅうよう）が 1894 年から 1930 年代に手がけたポスターや関連資料 53 点が、町田隆要の遺族から寄贈されました。このコレクションをもとに 1976 年、「近代日本印刷資料展―石版印刷を中心に」が開催されます。その企画展に向けて、今井先生は秀英舎（現・大日本印刷）の画工だった橋本正平氏に印刷技法についてレクチャーを受けました。橋本氏との長きにわたる交流から、北烏のポスターを多数保管していた北烏の高弟の風間四郎氏を紹介され、寄贈に至ったのだと言います。

「北烏のご遺族や、たくさんおられるお弟子さん一人ひとりに許可をもらいました。東京都墨田区の風間さんのお宅があった辺りは、車が入れないところ。私ともう 1 人で訪ね、大量のポスターを 2 人で分けて、手で抱えて地下鉄に乗って大学まで持って帰ってきたんです」

大正～昭和初期の ポスターの魅力

多田北烏は 1916 年頃から 1941 年頃、つまり大正から昭和初期にかけて、ポスターや雑誌などのデザインを数多く手がけ、商業美術運動の指導者として活躍しました。

代表的なのが、一連の「キリンビール」の広告です。北烏は 1920 年から 1939 年まで、同社のポスター制作に携わりました。このほか、電化製品、洋服、家具、デパートなど幅広い企業ポスターを制作しています。描かれている商品には、いまなお販売されているものも少なくありません。

「現代のデザインには『生活』を感じさせるものがそんなにありませんが、大正～昭和初期のポスターからは、北烏に限らず『生活』を感じます」と今井先生は言います。

ポスターは単に広告する商品を、生活のなかにどう取り入れたらいいのかを示しているだけではありません。当時の一般の人の暮らしぶりからはおよそ不釣り合いな調度品に囲まれていたり、ドレスを身に着けていたりと、憧れの生活環境を描いているものも数多くあります。「現実と理想の両方が描かれているために、『生活』がどう考えられていたのかまでわかるところが面白いのです」

当時は日本画や西洋画の画家と比べると、北烏のような商業美術家の地位は、けっして高くはありませんでした。そのような状況のなかで、北烏は外国の雑誌から最先端のデザインを学び、情報収集に努め、作品に引用していきました。

北烏は 1922 年に日本初のデザイン制作会社「サン・スタジオ」を設立しています。後進を育て、分業で制作しました。ポスターのうち、「多田北烏」と署名があるのは自らがデザインしたもので、「サン・スタジオ」あるいは「サン・北烏」とあるのは、アートディレクションに徹するなど、弟子と共同で制作したものと考えられています。

印刷技術の発展と表現の変化

多田北烏が活躍した大正～昭和初期はまた、印刷技術が著しく変化した時期でもあります。印刷によって作られる作品は、技術によって表現が規定されるため、表現方法も刻々と変化していきました。

初期の頃は石版印刷が主流でした。石版印刷では、オリジナルの絵を画家が描き、印刷会社に雇われている画工が石版に写します。「そっくりに描かないといけないから、画工は画家たちからデッサンを学んでいました。給料がよかったこともあり、東京美術学校（現・東京藝術大学）の学生がアルバイトで画工をしていました。特に日本画の独特の抽象性が、アール・ヌーヴォーやアール・デコの様式を模倣するのに役立っていたようです」

石版印刷で原画を再現するためには、製版に莫大な時間がかかります。10 ～ 30 色もの色を用いた大きなポスターでは、製版に 1 カ月もかかったと言われています。和田英作（伴定爾製版）の「大正天皇騎馬図」は、点描石版の手法で、網点を 1 点ずつ打ち、製版になんと 6 カ月かかったそうです。

手工的であり、さらに画工という中間の職を挟んだために、石版印刷では簡便化が図られました。「だんだん色数を減らしたり、網点をあらかじめ作っておいて転写して表現したりして、工程が省略されていきました。その変遷がまた面白いんです」

その後、機械的な写真製版が主流になっていきます。「写真製版とは言っても、初めからいまのように精密な複写ではありませんでした。MP 式という国産の簡易的な写真製版はややぼけた印象で、いわゆるレタッチを施さないと使いものになりませんでした」

技術の変化に伴って、デザイナーの役割も変わりました。石版では図案を印刷会社に渡し、画工が石版石に描き直して製版していましたが、写真製版以降は印刷機にかける状態の原稿までをデザイナーが担いました。

北烏は独学で時代の変化を取り込んでいきましたが、この頃には、東京高等工芸学校（現・千葉大学）など、図案を学ぶ学校・学科も開設されています。戦後は学校で学んだ世代が活躍し、世代交代がおきます。

多田北烏のポスター群は、日本のグラフィックデザインの礎が、先駆的な海外の事例などを取り入れつつ築かれ、絵画とは違うデザインの存在意義を示していった過程を示しています。同時に印刷技法のめまぐるしい進化の波に乗って、新しい表現方法を得て制作に活かしていく様子も見ることができます。

■ ポスターコレクション
美術館が約 3 万点を収蔵。1967 年以降、順次収集を進めており、国内有数のコレクションとして知られている。